

トマス・ハーディと彼のジュード

日 下 部 正 哉

Ⅰ．トマス・ハーディ

文 学 観 ミルは自由論で真理は時代によって変る。我々はその様にして最後の真理に少しでも近づこうと努力する、と言っている。この相対的な見方考え方はイギリス人の感覚であり知英であろう。相対的ということと、さらに対照的とはハーディの文学観、小説の構成や内容の著しい特徴である。

ハーディ夫人のトマス・ハーディの前半生、同じく後半生から若干彼の文学観（文学理論はない）を拾ってみる。

「或情景を詠う詩はその情景を見る人々の心に従って異なる。」（1866）；
 「小説の目的は異常なものへの好奇心を満たして喜びを与えるにある。…作者の仕事は興味を呼ぶ異常なものと現実の普通なものとの間の均衡を見出すことである。そのためには人間性を異常に描いてはいかぬ、不信を招き入れるから。異常性は出来事に置く。」（1881）；「扱う出来事を異常にしたり通常のものにする手心を精確に心得ている作者は芸術の鍵を握っている。」（1893）
 ；「芸術は芸術家の特異性に最も強く訴える物事の特徴を力強く表現するために物事の実際の釣合いや秩序を変えること…斯様にして実際の物事が含む重要な諸特質を一層明らかに示すことである。」（1890）；またレズリ・スチーブンの言葉として「詩人の窮極の目的は彼自身の心情を示して読者の心情に触れることである。」（1879）と書留めている。以上は物事は相対的価値に於て存在するから作者は自分の特異性に従って物事を見、自分の特異性によって見たものの価値を定め、定めた価値を誇張しそれを出来事の異常性に於て、非現実

的印象を与えない範囲で、描き出す。この様にして読者の心情に触れるべきである、ということであろう。又「悲劇は宇宙に内在するものごとの或は人間が作った制度の、その何れかの敵対し邪魔する環象によって創り出されるであろう。」(1895)と言う。この宇宙に内在するもの、は「自然の本性から産れた何等かの目的又は慾望」(1885)、「情熱、偏見、野心」(1878)を意味するであろう。以上は実作に即した彼の文学観であり、そのまま彼の文学の特徴を物語っている。その一つの系として我々は彼にシェリイや沙翁晩年の浪漫的想像を期待し得ぬ。事物の釣合いや秩序を変えるときも彼の眼は人生と人間の平常の姿を離れないからである。又彼が小説で大切だと言う「有機的形式美、保留抑制の力、控え目な表現がもつ強調」(1913-4)に成功しているとは言い難いが、この古典主義的な考えも彼の作品の一特徴である。彼は又製作に関し「112封の石を山頂に押上げるのは成功で1120封の石を中腹まで上げるのは失敗である。併し後者は2・3倍も強い行為である。」(1907。参。1865.4; 1901.7.8)と言う。これは、定見の眠りの中で抱く真実の見解より努力して自ら思考する人の誤りの方が真理に貢献するというミルの考え(自由論、2章)に通ずると同時に、ハーディの人生探究と芸術的嗜好とが通じ合う機微を示し、更に彼が書く小説の重点は人物の結末にでなくその人生過程にあることを教えるであろう。

時・偶然・雰囲気 ウェセックス小説集の第一作**必死の弥縫策**(1871)は章と章を日と時間でつなぎ、筋が出来事と偶然に満ちている特異な作品である。印象はメロドラマ的であるが、時と偶然そして、当然これらと結び付き且つ文学観で強調している出来事、をこの様に使ったことには、「小説作法を手探りしていたとき」(弥縫策、序文)の試験的技法と言って片付けられないものがある。これより前に時や偶然を詠んだ詩があって、之等は彼の人生感に由来すると考えられるからである。時は美や恋愛を幻に化して意地悪く人間を欺くという考えは詩集、小説の到る処に見られるが、既に同じ

時がアマベル（1865作）、急変（1866）、女の訴え、I（1866）、間色の風景（1867）に詠まれ、時は「残忍な暴君」、「獵人」などと呼ばれている。偶然（1866）という詩では「鈍感な偶然」と「慰みに賽を弄ぶ時」を「半盲の宣告者達」と呪い、小曲（1870）では「我々はみな偶然の奴隷だ」と歎く。之等時と偶然は更に愛のジレンマを造る自然（女のジレンマ1866）、結婚で愛を殺し従って愛を知らぬ墮落した子を産ませて平然としている「偉大な母」自然（結婚式で1866）と結び合って既に彼の強い人生印象になっている。それが単なる感傷でないことは幻の中をさまよつて行つた（1866）の知性が傍証するであろう。この詩は私を光溢れる蒼穹の巨大なドームの奥に据えて客観化し、恋人を「沈黙を守る荒涼たる宇宙」のなかに輝く地球の上に置いて清く深い愛でつなぐ。彼は之等の人生印象を基にして、彼の人生観を展開して行くので、例えば時の笑い草の多くの詩は時が愛の幻と希望、美と恋愛を与えて取り上げ、偶然と組んで人生に予測し得ぬ悲劇をもたらすと歌い、更に人間に自然な性情が過度の情熱となり、ために人間は思慮を失い自分も他人も不幸にするという人間性の問題を加えている。

弥縫策の翌年そのメロドラマ味を完全に脱した美しい緑林の樹蔭が出る。併し1887年には、人生は苦悩、暗黒、死だ。笑うことなど出来ない筈だ。笑う時は真実を忘れていたのだ。と書きとめ緑林の静かな生活を包む落着いた芸術的調和の世界に安住出来ず、人生の悲惨から本能、それは既に自然の観念が含んでいたものであるがそこから更に進んで、本能と境遇の関係を主な問題とする様になったようだ。「普通の人の情熱、偏見、野心によって産み出される悲惨な出来事を避ける骨折りを人物が少しもしないためそれらの情熱、偏見、野心から生ずる境遇の中に漸次閉じ込められて仕舞うことから或筋又は悲劇が生ずべきである。」（1878。参. 1885.11.21）。この人性観は展開してディナスツの宇宙観に到る基本であるが、今は、彼が弥縫策のねらい「神秘、もつれ、驚き、品性のゆがみ」（序文）の世界に帰ったことを意味する。この本能と境遇の関係を

偶然 を視点に簡単に調べてみよう。

タイタニック号が造られた時、凡ゆるものを動かし促す内在意志が…冰山を造った。二つは無縁に思え、互に鎔接し合うとは誰も知らなかった。二つが符合した道筋を通り…やがて才月を織りなすものが今だ／と言ったとき、完成の時がきて両半球を震撼する（二物の収斂）。これは偶然と思える出来事の奥に働らく必然の筋道を歌った詩である。狂燥の群を遠く離れてで52章を7つの部分に分け陰微の中に次の53章の悲劇へ進む幾筋かの道を殊更らに書いているのも同じ考えに基づく。併しこの方は動機を持ち人間が過度な情熱に閉ち込められることから起り、偶発事として驚きの眼で見られる悲劇である。マーティは偶然ジャイルズと一緒に夜明け前の道を歩いて来る。「夜明け前の 淋しいとき、灰色のものの蔭は、物も心も、本当に灰色である。だがしかし彼ら夫々の孤独な道は決して無縁な図柄を作っているのではなくて、白海からケープ・ホーンに到る両半球にその時編み続けている人間の行為のあの大きな網のなかの模様の一部であった。」（森の人々、3章）は偶然がマーティの情熱を煽って編み上げる悲しい運命の影を暗示的に出したものである。狂燥の群でガーゴイルの位置から、雨が降ればファニの墓に起る事は因果の自然現象であることを明示しておいて、好色の結果罪の意識に苦しむトロイにそれを神の刑罰と思わせる。この樋の噴水口の貌に作者が予め与えた、無気味な、「周囲の風物を嘲笑して」いる如き性格が、品性のゆがみから拔差しならぬ境遇に陥ちたトロイの罪の意識と結んで、運命と神秘の濃い陰を醸す。そして合理と神秘が奇妙に混合している弥縫策は相次で起る偶然に、予感と遠隔感応（この二つを作者自身後年経験している）、品性のゆがみと驚きを配して運命と神秘を醸し出しているのである。

偶然の起る筋道、条件、時期、様態は予知出来ぬ。夫自身神秘である。この偶然に就ての彼の概念には事物の自然過程の必然的結果としての出来事と、受ける影響からこれに意味を投入して解する有意的出来事の二つがある。前者

は「何事もその発端に於て約束していることを実際には確証しない世の中」（1882）という人生観や、「歴史は…流れである。…その展開に何等組織的なものがない。夕立が道端に作った細流の様なものであり藁切れ一本でこっちへ砂の小さな集りであっちへ道を変える。」（1885。参、1884・10・20）という史観の基礎観念になる。合理的に理解される前者だけでも人生を不安定なものにするのに、人間は過度の情熱、野心、偏見など「品性のゆがみ」から、拔差しならぬ境遇を自ら作り出して、この偶然に暗い運命の意味を与える。そしてこの人間性のゆがみによって「人間の行為のあの大きな網」が編まれるのであり、それは一農夫の滑稽な雨乞いの迷信（1883・3・13）から奈翁の大野心にまで広がっているのである。

運命の影がウェセックスという土地の迷信と相通じて醸す神秘、作者が自然物に与える感覚や感情、村人達に与える自然な素朴な性格、が彼の小説の雰囲気を作っている。それは文学観で明らかのように「物事のコルを捉えてそこに内在する意味」（1886）を捉える彼が、自分の心の中から作り出した一つの象徴である。従って村の生活の変遷とか特色、地誌などの特殊は明確な心象を残さない。代りに田舎、自然、素朴が息づいている。そして彼はこの田舎、自然、素朴に都会、文明、墮落を常に対置して彼の人生観を展開する。だからウェセックスの地誌に興味を持ち過ぎることはハーディ文学から外れると思われる。ジュードの場面は殆ど都会であるが、従前のウェセックスの雰囲気浸透して、作品の性格を成している。それはジュードとスーの家系的遺伝の強調と彼等二人が根はウェセックスの田舎者であるという、それだけのことから産れる雰囲気であって、ここに我々は彼のウェセックスの雰囲気の殆ど完全な象徴を見ると言える。

氣質　この時・偶然・自然の観念の母胎として彼の生来の氣質が考えられる。ハーディ夫人の本によると、4才の頃踊り乍らその曲に涙し、5・6才の頃ジュードの様に仰向けに寝て顔の上の麦藁帽を透す光線を見つめ乍ら大人

に成りたくないと考え、父が石で打落した冬の鵜の羽毛の様に軽い感触がずっと心を離れなかったり、13才頃は他人の手が身体に触れるのを嫌ったとある。生来内気で敏感で、感受性が強く情のうみ易い子供であって、既に人生の悲しみを感じている。それは同時に彼の愛情が深いことを物語っていると共に、将来の彼の神秘的性向の土台をなしている。「活動力を持たぬ総ての自然物が時々私には悲しい物思いに言葉を失っている様に思える。」(1877)という後年の言葉はこの気質から産れて来る。併しその間には進化論の思想が加わっているであろう。更に後年「ダーインは子供達と野獣との間に何の違いもないことを原理で明らかにしている」(1904)、「有機体と無機物は相互に混り合う。一つの自然と法則が之等を一貫して働らいているから。」(1915)という言葉になって表れるもので、それが彼の気質に思想と信念の裏打ちをしていると思われる。屠殺される動物の輸送機関改善のため遺言で金を残しているのは最早少年の気質から来る感傷ではない。同時に彼は小学生として数学に優れた頭脳を持ち、長じては着実と合理の質を具えていた。20才建築志望で希臘文学をやめ、22才建築勉強に初めて倫敦に出た時、6ヶ月後になって不用の復り切符を捨て、上京後流派画風の洞察を得るため国立美術館で一度に一人の作品だけを見つめる方法を立てた。生来の気質から苦しむものに深い同情を寄せ、人生の悲しみを強く感じた彼は、同時に着実と究理の知性をもって人生を正視し、人生から美、幸福を取り上げる時・偶然の観念を持つに到ったと考えられる。「勇氣は理想視されて来た。恐怖だって理想視されていいではないか？——恐怖は勇氣より高い意識であって、一層深い洞察に基づいている。」(1893)は悲劇と承知し乍らなお人生の現実を正視する人のことを言っている。この悲劇感から、人生の悲劇的神秘に気付いた人には心で捉える抽象の姿の表現こそ芸術である(1887.1)という人生と芸術を一体とした彼の自然、人生を貫く悲劇的神秘感の文学が産れ、ここから更に「私は非合理的問題に興味を持つ、宇宙の原理は非合理性であるらしいから。それは正確に名付け得ない原理であって、

…合理と不合理の中間点に存在している。」(1901)という宇宙観が展開する。

夫人の本の諸所に見え、昔の可愛い歌ならどれでもに歌っている様に、彼は子供の頃の、知人、話や歌など素朴な思い出に誘うものを始終懐かしみ、故郷の古い風習や伝説に格別の興味を寄せている。磨り減った闕や壊れた器物に前の居住者を連想して懐かしむ詩、雪の石段を上ってくる猫、夕暮の鵜、其他生物を歌った詩、**狂燥の群**の中の犬など、これらは彼の気質から産れていると同時に、彼はそこにひずんだ人生の慰めを見出しているのである。

彼の文学は詩作で始まったが、87才で死ぬ前日と当日の夕方詩の朗読を求めた。彼は詩が好きだったのである。世俗的野心が弱い人だったことは夫人の本に明かだし、彼の気質や人生観に見ても当然と思える。併し金を得るために小説を書き、妻に残す遺産のために、そして将来完本に戻すのを楽しみに、削除改竄の労役に甘んじて、雑誌連載の「単なる日傭仕事」(1886)をつづけた。遺産が出来ると、小説と同じ内容を歌っても「ただ世人に頭を振らせるだけ」(1896.10.17)で済む詩に帰った。このことは彼の文学に於ける人生観、宇宙観の重さをそのまま立証している。

人生観 曉闇、夕陽なども含めて彼が描く自然は夫々独自の生命を持ち彼の文学の一特色をなしているが、彼の最大の関心は人間であり、それが彼の気質、神秘感、人生観によって自然にまで拡がったと言える。人生を悲劇と見てなお人生に取組んだのは彼が人間に強い愛着を持っていたからである——「或る場所に人間が建てたもの或は印し付けた痕は無意識に自然が作ったこの様なものの十倍もの値打ちがある。」(1878. 参. 1878. 4. 22)のである。併し彼の小説には内面心理の剔てつかなく、性格の形成成長過程の描写がない。彼は善意をも含む人間性に視点を置いて色々の性情の人々を作り、彼等を様々な境遇に置き、様々の緊張関係に彼等が如何に対応し、夫々如何なる生涯を送るかを詩や小説に書く。**人生の小さな皮肉**はそれを単純化して見せた物語

集である。一般に人間の内面その特異な姿に目を置くと社会や人生の実体への突込みがばやける。彼は人間の本質を究明するのではなく、人生の美と真実を探究するのである。彼はその気質から人生を悲しいもの人間を不幸な存在と見たから、それらを幸福な美しいものにする途を求めたのであって人生というものの人生に於ける人間の在り方が彼の問題になったのである。

彼が取扱う人間の本能は主に恋愛、憧憬、頑固、野心、情慾、嫉妬などであるが、それらに支配されて理性を失い恣意的に事物をゆがめる愚かさを**王の実験**（王は**運命**の意味）に歌い、又心の中を覗くと人それぞれに違った慾望が動めいていて表面の和合調和とは似てもつかぬ万華鏡を見せることを1888年7月8日のノートや詩**自己を見ず**で指摘している。他方自分自身の反省努力によって自分の本能の欠陥を克服し、成長してゆく姿は描かなかった。彼は人間性の欠点と人間の愚かさを指摘し、夫等と直結する人生の陥穽や悲慘を示して世人の反省と自覚を願ったのだと考えられる。

彼は「よりよきものへの道がありとするならば、それは最悪のものを全面的に直視することを強要する」（**テネブレ風**に、II）と歌い、「悲観主義とは先づ人間の不幸を正確に診断してその原因を確かめ、次に救済の道があればそれを見つけ出しにとりかかることである。」（1918）と言う。そして次の一聯の詩其他には将来への希望がない。死、時、宿命が人生を支配している**人生に寄す**、「人生の裸骨をまざまざと見たあと」の**合衆国への招待を受けてや、質疑の一夜、考える焦立ちを解かれたら**など、更に1889年2月26日のノートや1901年6月20日の手紙など。

併し同時に次の一聯の詩には、決して華々しいものではないが、人類解放の根深い希望を歌い、確信の響きもきこえる。1967、**希望の歌、空に不思議が現**
 (1) **われた、** 宗教の純化を歌った**死んだ信条の墓場、** 真実を見つめる英知に信賴
 (2) し、忍耐を力として、やがて真実の言葉が世の毒気を貫いて遠く拡がり真実が世の仮構を矯め人生は本来の価値を取戻すであろうという希望を歌う**チヨーチ**

(3)
・メレティスや、アバティーン、誠実に寄すなど（1はシェリイのプロミーシュス3幕4場98—204行を、2は同じく4幕9—34行、3は2幕3場36—42行をを想起させる。）。更にオーク、ウィンタボーン、クリム、ジュードなどの人間像を描いて、彼は人類の未来への希望をこれらの男（女ではない）の生き方が教えるものに託したのだと言える。

彼の宇宙観にも自然は自然法則的に万物を造り、造った物の価値を認めず時に命じて捨てさせる（新年の前夜；神の教育）、我々はその厳然たる事実をそのまま受容れようという諦念（夢の中の質疑；イエラムの森の話）の詩と同時に、「無意識の内在行為者」の遠き将来の覚醒を歌う詩（打撃；断片）自然の秘密を知る夕暮のつぐみの歓びの歌がある。尤も打撃には人生を悲劇に変えた打撃が人間の所為でないと判れば、という条件が付いており、それは「ボナパルトの際限なき野心と傲慢」（僕達が知っていた人）の如きものを言っているが、それも今では透視力を持つ魂、総てを理性の光に照し出す思考が、共感慈愛を育てて人間は最早戦争の熱を持たない（病める軍神^{いさくがみ}）のである。大戦後1924年の詩コンパッションにも同じ希望を歌っている。

彼はシェリイの様に人生の苦痛から反射作用的に理想に飛び行くことはしない。「現存する善きものを保守し、悪しきものは排除して善きものをそこに置き換える」（1879）「進化論的改善論」（最近の抒情詩とその前の抒情詩、弁論論）と、苦痛を共感することによって窮極には「隣人を汝自身の如く愛す」（1890。参。思い起させるもの）という希望を持つ。「生涯を通ずる誠意」（或森の中で）、生涯変らぬ愛（美しき人）、親が子に寄せる情（彼女の父）、「厳しく自己を滅却した献身」（竝ぶ塚のそばで）の尊さなど、「思い遣りある優しい感情・胸の奥から湧き出る親切」は時にも壊し得ぬもので、それがやがて科学的知識、自由意志と共に働くことに彼の希望を託している（最近の抒情詩、弁論論）。「人生から総ての偽りのロマンスを取去った後にも人生には十分の詩がある。自然も同様である。それらの欠点を新しい精神の光で照ら

して、そこに未知の美を作り出すのが芸術であろう。」(1878。参. 1877. 6. 3) という言葉の根底にはここに述べた彼の人生観の希望がある。だから「無意識の内在行為者」の覚醒の希望も産れるのである。これは彼が度々言っている「醜の中に美を見る」ことであるが、人生の悲劇に余りにも強く目をとられたためであろうか、時と老いを恐怖感で詠い歎き、エドリン老婆の素朴で健康な心の他には、老醜に心の美を見た例がないのは、筆者の年令のためでなく、ハーディとして物足りない感じがする。

彼の結婚観は要するに、真の結婚は魂の結婚、自我と他我が一つに融合した状態にある愛の結婚である、という。この様な結婚では、ルソーの理想主義の結婚と異り、処女童貞は問題でない。オークやウィンタボーンで示した結婚である。グレースの言葉『今の貴方の大胆さを私の結婚前に半分でも見せて下さったらお古じやなくて、私を貴方の初々しい新妻になさっていたでしょうに。』はウィンタボーンには無意味である。処が文明の中に育った「情緒繊細な」ナイト(青い双眸)や「過度に鋭感な」クレア(テス)は愛のなかに冷たく固い主我を立て通して、魂の結婚の出来ぬ人達であった。

文明、都会、品性の病的歪み、と自然、田舎、健康な力は実に判っきりした対照をなしている。クリムの顔の文明の苦悩を刻んだ深い筋は早く**弥縫策**の若いエドワードの額に微かに表れている(**弥縫策**, 2. 4. 32)。彼が最初にかいた小説**貧しい男と貴婦人**は郷里と倫敦との対照的生活経験から生れ、中流上層階級の生活、政治、宗教を諷刺したものという。功名野心を知らぬ素朴な人々に寄せる愛着を**彼の不滅、忘られる定めの人々、後替者達**に歌い、**彼女を定義する言葉**では愛は「地味な」言葉で表し「平凡な」箱に大切に納めるべきものと言う。自然の掟に従う蜂、ががんぼ、蛾、蠅(**八月の真夜**)は彼女の秘密を感得しており、籠の鴉(**放たれて帰つて来たつぐみ**)や非情冷酷な自然の中のつぐみ(**夕暮れのつぐみ**)は人間が知らぬ希望と歓びを知っていると讃える。又「地方的感情は非常に貴いもので個性の本質に属し、偉大な思考や行

為をさせるあの粗野な熱狂は大半この感情から産れる。」(1880)、田舎の賤しい生活は可成り野卑だが「都会の屑共をひどく有毒なものにするあの好色は普通田舎にはない。」(1884)と言い、知人の非難に答えて「人と物を混同するドーセットの野蛮人的観念と君が言うものは、最高の想像力即ち詩人の才にも共通である。」(1890)と応酬している。他方都会と文明に就て「ロンドン。四百万希望の捨場所ノ」(1889)、「ロンドン、人間のあの熱い鉄板、その上で我々は初めいい気に歌い、次にシュッシュッと蒸気を出し、次に固焼きになり、次に乾涸びて塵と灰になって仕舞うノ」(1892)と言い、又物質的成長と精神的成長の甚だしい不均衡を漸次に赤十字が直して「我々の内面的進歩と外面的進歩の諸関係から文明を非難することがより少くなるかも知れぬ。」(1900)、物質的進歩は著しいが「真の文明も同様に進歩したとは思えぬ。…今日私心なき親切は稀である。」(1920)と言う。更に「人間が文明と呼び慣れているものに沿って進んでゆくことに対する自然の無関心は此度の戦争を彼女にとって何の重要性もないものにする。彼女の持続に一つの地理的な傷を与えたということ以外。」(1920)と言って、自然と文明の乖離を指摘している。

運命の影の棲家で暮らしたは平凡極まる運命の男も農場を離れ町の人々に雑ると孤独感と共に野心が産れることを歌い、**墮落した娘**は田舎出の娘を歌って田舎の素朴、徳性と都会の奢侈、墮落を対話の形で実に克明に対照、列挙する。

建築の仮面は想高く思念深き人々が住むと見える由緒づきたる建物に実は守銭奴が住んでいる。と詠んで、古き歴史の文明の外面と実体の相違を暴露する。これは彼の宗教観ともつながり、又ジュードのクリストミンスター大学を想起させる。都会はルソーが強調しクーパーが歌った様に人間が自然を離れて作ったものであり、その文明は野性の力と共に素朴、誠実、情愛を人間から奪い、野心、焦燥、好色を育て、人為的に慣習、因襲を作り人間のなかの自然なものを抑圧して、ものの真実を見るな、「心に歎くとき楽しいと言い、信じなくても信ずると言え」(**誠実に寄す**)、虚偽を守って人生を終えよと命ずる。これが

人生悲劇の他の一つの原因「人間が作った制度」（2頁参照）である。森の人々に見る様に自然界にも斗争がある。併しその斗争は自然法則に従うもので、物理的範囲を出ない。シェリイが歌う様に動物が行う殺戮は空腹を満せば終るが、人間の野心、貪慾には際限がないのである。

基督教は西欧精神文明の中核である。ハーディは基督教に就て早くから合理主義の立場にあった（参．前半生，37—9頁）が，人生を洞察批判し，宇宙観を持つに到って，彼の基督教批判は痛烈なものになった。「宗教的又ハ宗教は…人道，心情の善，並びに偉大さに向っての新しいより高貴な感情を表すものとして用いらるべし。その語の古い意味——儀式，礼式——は滅びて」（1907）。「善神論は二千年を経て，今日の欧州の…不名誉な恥かしい状態を産み出した。ティナスツの中にあるような無善無惡の神を用いる方がよい結果を産むであろう。」（1917），「羅馬帝国の下で人々は他人や動物に対し今日より情け深かった。基督教は自ら敗北を告白して，別の宗教が代ってくれと何故言われぬのか？」（1919）と言って基督教の因襲と無力を攻撃している。因襲に泥んだ僧の心には基督は住まず僧職が權威となり職業になり，勤行儀式は形式になって，しかも彼が説教するときは神に就て一切を知るが如くに語る。この神に祈る人々の信仰は空想であり，光の国は妄想の囂である（知覚なき人々）。教会の窓ガラスの飾り絵を描き乍ら因襲にあきた若き職人は希臘の神々の姿を夢みる（若いガラス染め職人）。人間への泣きごとでは，世の歎きを超えた所に祈りの対象として人間は慈悲の座を考え出したが，私の徳も力も実は人間の内部に在るものなのだ。真実を見透す目に射竦められて最早私は薄い影になってゆく。人生は人間の心情だけに依存し，人間の心情は友愛で強く結ばれ，思い遣りある優しい愛情・胸の奥から湧き出る親切に輝いている。この事実，明日にも人間は直面して幻影の救いの神など忘れ去る。初めから救いの神など作ってくれなかったらよかったのだ（神の葬式）と神は歎く。ハーディは「私の魂が崇め得る主が見つかる迄は，善き仕事を崇めましょう……」（

1907) と言つて、人間の救済を、彼の小説にもそうである様に、神に求めず我々の自覚と愛と理性に求める。併し彼が神の信仰を否定しなかったことは夫人の本に明らかである。唯、人間の無知を利用した奇蹟、人生苦を忘却させる麻薬的欺瞞、『教義の麻薬で痺れさす』（ジュード、6部8章）不合理、と中世以来の教会宗教の固定した因襲を彼は非難攻撃しているのである。

宇宙観 「私には哲学はない——唯単にごちやごちやした印象の堆積…だけを持っている。魔術の見せ物を見て困惑している子供が持つ印象に似たものだ。」（1920）、「詩のなかで原因とか神々という言葉で纏めているのは無数の無意識的諸原因だと思って欲しい…私は一度として科学的であろうと試みたことはない。」（1920）、又テスの神々の主宰者は文学的擬人化なので人格神などではない。ただ人間を苦しめる働らきの根源として共通したものを持っているので、イースキラスがゼウス神（シェリイでジュピター）に用いた言葉を英訳しただけである（後半生、3—5頁）と言っており、彼の宇宙観に明確な概念を求めることは困難である。彼に宇宙観はあるが、その体系はない。従つて彼の哲学を考え、殊に、「詩の使命は印象を記録することである」（1917）、「一聯の個人的諸印象に形と脈絡を与えてみようとしただけのもの」（ジュード、序文）と言う彼の文学から哲学を採することは間違いである。

「名辞や措辞は先人哲学者から借りねばならぬことがあろうが、その理論を借りては自殺行為だ。」（1901）と言う彼が、「正確に名づけ得ない原理」だから仮りに借りた名辞の故に、ショペンハウア等を云々してハーディを殺してはいけない。併し彼がベルグソンを反駁する根拠が人生に実在する苦痛にある（後半生、168頁）ことから、又「詩人は…彼自身の思考を表現すべきである。」（1918）と言っていることから見ても、彼の言う「印象」は、既述した様に、生涯を通ずる彼自身の人生経験と思考とを内容にしているのであって、彼の人生観、宇宙観にはそこに展開する一本の筋道が通っている筈である。

悲劇的人生印象から、時・偶然の観念を持ち、人生経験から更に根源的に悲

劇の主原因として人間性の歪みを認め、更に之等に基づいて彼の想像と思考はその様な人間性の創造者として、自然を性格付ける。それは「万事偽善。自然は偽善者の首魁だ。子供達は完全に騙されている。大人達も大かれ少なかれ……」(1883。参。ジュード、「万象の呻きをまだ知らぬ小さな多くの声」)から始まり、自然は自分が造ったものの苦痛を除き得ないから「彼女を非難から救うためには彼女は盲目で自分の行為を批判出来ぬとするか、或は自動人形で自分の動きを自分で調節出来ぬと考える他ない。」(1902)という考えに展開する。要するに、人生悲惨の主原因として、我々の考うべき問題は人間性とその母胎の自然であるということに帰結する。彼女が住む処は「茫漠たる広大界」(運命と彼女)、「空間界」(てりうそ達)で、夫運命の完全な支配下にあるから盲目である(沮喪)。その器用な指先きに愛をこめてものを造るが、盲目だから万象はみな疵物である(欠如した感覚)。夥しい呻き声が聞えて来る様に思うが見ることは出来ぬ。運命に地球の様子を尋ねるが彼には感情が無く歎苦、正邪の何たるかを知らぬゆえ答えてくれぬ、彼女は一人悲しい推測に落ち込む(運命と彼女)。そこで、地上のこの有様を目を覚して見て下さい(眠り職人)という願いになり、既述した人生観の希望とつながって、愛の手が何時迄も自分自身の子を苦しめる筈はない(欠如した感覚)という希望になり、更に万象は私を崇めて来たが、最後に最も精妙に造ってやった人間は私の欠陥をあげき、私が与えた愛の火も鬼火だと言う。今私のこめかみには理性と透視の知力が荒れ廻っている、讃歌などもう耳に入らない、という母の覚醒の苦しみ(母は歎く)になる。彼はその気質の故に、初めは自然はわざと人間を苦しめるものと感じたが、やがて自然に憐憫の情が動くと考え、終には覚醒するものという希望を持つに到った。

宇宙創成の始めから存在し、一切の事物の生起と変化がその中で生じる永遠の時の流れのなかで、孜々として創造の行為を営む自然と、その行為を律する無感情の運命又は法が彼の宇宙観の核心をなす二要素である。併し「一

般原理」(1881)で彼が解明している法でも、不可知なる神の中の神でも、ディナスツの根元力にも、両概念が混在している。この混同は他の場合にも見られ必ずしも明確ではないが、私は之等を次の様に理解したい。

「動作大部分自動的、反射運動等。動機と呼ばれるものの結果ではなく…。」(1881)、「人間の自動作用或は衝動作用の史劇を書く——即、案内者であるべき知識の方が行為よりずっと後れている人間行為の有様を。」(1882)、「社交の集り、街路、部屋或は何処でも其処に居る人達を屢々夢遊病的状態にある人間の様に見る。その動きを自動人形的にやっている人々——その動きが何を意味するかをはっきり知らないでいる人々の様に。」(1886)、「ナポレオン劇に用いる方法。推進力；情感、性癖。人物達は理性の影響下に行動しない。」(1892)、「亡霊的力が一人の男に働いているのが見える。彼はその力の支配下に行動している——パセチックな光景——この強制は。」(1922)。之等の覚書きは、既に自己を見ずで紹介した様に、又彼の全小説で主要内容をなしている、強い本能的慾望の支配下にある人間の状態である。「七霊的力」は「ボナパルトの際限なき野心と傲慢」を云うであろう。ゲーテが「デモニッシュ」と言って讃えた偉人は、ハーディにとっては本能に操られる自動人形にすぎない。併し、亡霊的力と言いデーモンと呼ぶものも実体は一つであり、人間の一切の創造活動の根源力を言っている。この根源力は、一切の生物の母として考えられた自然の根源力と同質であり、人間本能は人間において現れた自然の一樣態である。ハーディは、「ディナスツの根元力の理論として用いた決定論的性質は集合意志の性質である。だから全体の各部分には全意志間の均衡が存在し、各部はそれ故厳密には何等かの自由を持つ。その自由は事実宇宙の爾余の全意志が平衡状態にある場合常に自由なものとして働く。」(1914)と言っているがナポレオンの本能が宇宙の爾余の全意志に衝撃を与えてその平衡を乱すのである。彼は「宇宙意志に動かされ支配され…自己の自由を失う」(1907)と共に他の「人物達」をもその強い野心で引きずって自

動人形にするのである。その同質關係に基いて、人間に具わる情知を自然に移し彼女に情感と愛と意識を期待することは無理ではない。自然に情感を与え愛を想定するなら、欠点ある人間性を創って、やむことなく人生を悲慘にする彼女の創造行為は無意識の働かし、彼女は意識の導き即ち目を欠くもの、盲目と見なければならぬ。若し盲目でないとするなら、地上に慘禍をもたらしたナポレオンが本能の傀儡である様に、自然は何か内在的な自然律に操られている自動人形と見なければならぬことになる。次に「集合意志」は自然でなければならぬ。万物の母自然という概念は自然を生命者、行為者と見ることであって、生命ある行為者に情感意欲を想定し、且行為者を意志者と見ることは無理ではないからである。そして創造的本能の慾求は生物が共有するものであるから、この意志は「集合意志」であるという考え方が産れる。以上の理解によると、自然が人間に与えると見える人生の悲慘は実は人間本能の仕業であるということになるであろう。併し、人間は本能の欠点を意識し、理性によって本能を導くべきことに気付き始めている。人間は自覚しつつある。従って母なる自然にも将来の自覚を期待し得る。だから彼は「宇宙の無意識の意志が自己に目覚めつつあるという考えは私が最初だと言ってよいと信ずる——私は全体の部分に既に起っていることはやがて全集團にも起り得るという考えによってここに到達した：…全意志はそれによって意識的になるのである。そして窮極には共感的になると希望してよい。」(1907)と言うのである。

法は彼が事物の原因と呼び、「その原因は道徳的でも不道徳的でもなく、非道徳的である：『無愛無憎』と私はそれを呼んだ。」(1920)と言っているもので、原因という言葉で推測出来、又道徳的云々で判る様に行為者でなくて、意志ではなく、宇宙の個々のもの夫々の発生、展開、変化、消滅の因果法則、自然界の因果律である。運命と彼女の運命はこの意味の法であると言ってよいであろう。

以上、ハーディは彼の気質から時・偶然の觀念を持ち、更に田舎と都会の生

活経験から人間性の問題を加え、人間性を中心にして田舎自然と都会文明とを対比しつつ、人生観を展開し、その悲劇的人生は時・偶然という不可避なものとは別に人間に内在する自然即ち本能の働きを主因として起ると考え、しかもその不幸のやむときがない事実から自然は不完全なもの、盲目又は自動的と考え、彼女を宇宙意志、根元力其他の名で呼び、彼の気質、性情はこれの覚醒に希望を託し、他方彼の合理性がその盲目又は自動的原因として自然を律する因果律即ち法又は運命を立てたという風に考えてよいかと思う。

Ⅰ．暗い運命の男ジュード

第1部1章は出世コースであるクリストミンスタ大学へ入学を志して、小学校教師ヒロトスンが村を出るところで始まる。移転の荷物は少く、数人の手伝いの男も動き廻るでなく、移転は明るく朝の空気にしずもる小さな村の閑散な感じのなかで終了する。章末には古い建物が無惨に壊されて行く跡が、現実生活の厳しい移り変りを示して、小説の地肌を暗示するかの様に叙述してある。併し、移転と同様、この変化の叙述も静かな村の空気を乱すものではない。この静かな雰囲気には固有名詞のきっかりした固い感じが抵抗しない様に、例えば「11才の幼ない子が」とあって暫くしてジュードという名が出て来るという風に、固有名詞の導入にも総て用意が払われている。その中で章の焦点は共同井戸のところに立つジュードに合わされており、ヒロトスンが発ったあとのジュードの重い憂いを明るい朝の空気が包んでいる。そのジュードを突然戸口から叱る大伯母の声はあたりの静かさを一層深くする。別れ際、ジュードに『動物や鳥を可愛いがるんだよ、それからよく本を読むんだよ』と言うヒロトスンはサ・ノブ・ヒロ愛の人と言えるであろう。彼はピアノを一台買って持っているが途中で熱がさめてやめたのは彼の性格の弱さを示していると言えよう。彼は本好きのジュードに野心の芽と、か弱いものへの愛情とを残して去った。

2章はジュードの目をクリストミンスタに向ける動機がテーマになる。フィクションの合理性を一本巧みに通して物語を展開し、伏線を伏せつつ作者はずっとジュードから目を離さない。前章の静かな村の空気とジュードの憂いはここにも続いて、大伯母の昔語りは内気な彼の心に「無用な存在」の意識を育ててゆく。彼が農夫トラウタムに痛めつけられるときも、騒ぎは実った穀物の広い畑の中に埋もれて、あたりは静まり返っている。身体の痛みより心の痛みが堪え難く、彼は仰向きに寝て、顔にのせた麦藁帽を透す光線を見つめ乍ら、自分が生物や木に寄せる愛情（異教的崇物に通ずる自然感情）と生活の厳しい現実（人為的社会現実）との大きなずれを初めて自覚し、「大人になりたくない」と思う。ほっそりした身体つきだが、彼には水を張ったバケツを両手に、休まず家まで運ぶスタミナがある。やがて「自然な無邪気な少年に見る様に、失意を忘れてとび起きる。」。彼の心には幻のクリストミンスタがある。ひっそりとしずもる村の空気と人生の悲しみのなかで彼の心に大きな変化が産れたのである。それは直ちにクリストミンスタの雨は「こんなに陰気に淋しく降るなど信じられない。」（3章）、そこは「農夫の恐怖も、障碍も、世間の嘲弄もなく…何か偉大なことに従事出来るところであろうか」（同）という少年の憧憬になって彼を惹く。

此の章にはジュードが丘の上から見おろして『すごく汚ないとこだな！』と言う穀物畑に関して、筋の展開と無関係に作者が回顧を懐かしむ叙述がある。作者は一方では昔この畑で営まれた自然な素朴な村人達の「生き生きした人間生活」を懐かしむと同時に、他方それを現在の「卑しい功利的な有様」と比べて、これをジュードの自覚に結び付け、更にこの小説の社会批判を、前章未より一層判つきり、出したのである。

16才の時ジュードの自己矛盾が初めて表れる。第一志望学者第二志望僧職で、彼が忙しい毎日から僅かな時間を作ってギリシャ文学の猛勉強をしている或日、ふと路上に坐り東の満月を拝し西の夕陽を拝む。彼はこの自然崇拜の現

れを「思いもかけず顔を出した迷信」と思い、僧職を目指す者の常識と慣習から離れたと考え、今迄の文学書を新約聖書にかえる（5章）。又「有難いことにねばりが有り余る程にあり」（6章）、クリストミンスターに行く時は人並以上濃い顎鬚の生えている（2部1章）そのエネルギーで、生活手段の石造建築勉強と大学入学勉強に出精して宿願の夢魃なる19才の夏、アラベラとの偶然の出逢いが「新鮮な激しい喜び」（7章）で彼を満たし、強い力で「宿命のジュード」（同）を惹く。それは今迄出世の野心のため置き去りにされていた情慾が無視されていた期間を埋め合せる激しさで自己の存在を主張したもので、ジュードに表れる第二の自己矛盾である。そして「ほんの一時の本能に瞬間的に捉えられ」（9章）で営むアラベラとの結婚生活は、憧憬と野心に燃える彼を「生涯跛にする畏」（同）であって、彼は11才の日の自覚に次で不当な社会慣習のひずみを身に滲みて知る。

22才のジュードをクリストミンスターに誘う「窮極の動機は知より情に一層近い関係を持つ因縁で」（2部1章）あって、アルフレッドストンの下宿から或時大伯母の家に帰った時暖炉の上にあったスーの写真である。これは建築勉強のため同所に出てから結婚まで即ち結婚前精々一年内のことである。そして「その写真はずっと彼の心について離れなかった」（同）のだから、これは、（1）心にスーを描き乍らアラベラと関係を続けたとすれば、ジュードの内面心理の描写が不可欠である。併しそれがないから（2）遠き思慕は手近かな情慾に完敗した、それ程彼の本能は強いということになる。「因縁」はスーに寄せる「情」であり、情がこの情慾を秘めているなら、スーとの関係に情慾が将来重要な意味を持つであろう。その因縁に就て「若い者によくある様に」（同）とだけ付け加える作者の簡単な肯定的な説明は以上の予想を一層強めるであろう。

クリストミンスター到着の翌日、石造建築の仕事が学究に劣らず尊いものだという「真の啓示」（2・2）が閃めいたが出世慾が忽ちそれを消して仕舞う。

作者は「これは近代人の通弊である焦燥が彼に於て表れた」(同)「社会的焦燥心で、高貴な才能から出たものでなく、文明が産んだ純粹に人為的な産物であった。…彼に比べれば、空虚な日々を屈託なく送る口腹の輩の方が好ましい人間であった」(3・1)と言う。ジュードは人類奉仕を念願し、孤独は神の意志と考え、死を思って煩悩を超絶せんとするが、その根拠は高教派の心酔であり、そこには奇蹟の礼讃と楽天観が腰を据えている(参・2・2)。又孤独から、スーは「彼の理想的女性となり、幻に様々の白昼夢を織って着せる」(同)。併し「彼女に抱く関心は性慾的種類のものであることがはっきり彼に判っていた」(2・4)のであって、上述の宗教的な心構えと実際との間にはずれがあり、野心と情慾(これはクロード・ディアスの場合の様に、隣り合せの本能である)が描く甘い幻想という点で一致している。入学の可能性を問合せて学寮長から職人は職人の仕事を続ける方が成功の機会が多いと返事されると、慣習を尊重する彼には理の通った返事だと判っていつら、彼の反応は激情に自己を委ねて泥酔となり、大学の塀に無用な報復の文句を書きつける。着実とウィズダムを欠き夢想到に溺れるこの様なジュードの生涯は、夜の「完全な理想的な」(2・1)大学と翌朝見る「同情的な面貌を一夜ですっかり変えてしまった」(2・2)大学の違いが暗示する種類のものであろうか。

スーは因襲の見本の様な高教派の教会用具店に住みこみの店員として働いている。2-4章から総合すると、小柄なほっそりした身体つきで軽快、豊かな黒髪の下に広い額の神経質な小さな顔、生き生きと動く黒い瞳と長い睫毛、きらっと輝く一瞥は時々思い切り溶ける様にうるむ。感情がびりびり震えて彼女の動きや言葉に表れ、それにヒロトスンもジュードも強く心を惹かれる。自主性が強く合理、聡明、豊かな想像力を兼備し、読書を好み記憶力が強く、進んだ社会文明観を持ち、理解を超え自我を離れたところに真理を認めない。慣習は「人為的に作り上げた悲劇」(4・2)であり、寄宿寮からの逃亡は慣習の強制^{*}に対し彼女が身をもって行う反抗である(参・3・3)。弱点は女らし

*『強制を…峻拒する』(5・3)のはジュードとスー両家の遺伝的特質である。

い弱点で、ウィズダムの欠如、ゲーテなら女の可愛らしさとする「狭い女らしいむら気を衝動的に見せ」（３．６）「理論に於て正しいことも実行に移すと間違っていた」（４．３）ことを常に学ばねばならず、「新しい感動を求める好奇心」（３．７）「きわどい運命のためし方をする性来の変った癖」（３．７）、理解者を持たぬ孤独感、男に「愛されたい」（４．２）女心を抱きつつ知的に且つ自主的に「情緒を楽しむ女」（３．７）だということである。彼女は「本当は中世よりも古い時代の女」（３．１）で自然な性情、異教的気質、「根は心の広い寛容」（３．６）など生来の気質に於てジュードと同じである。併し慣習を否定する彼女の社会文明観は彼女の気質とつながり其処から真直ぐのびていてその間に矛盾がない。だから気質と観念に就てのジュードの矛盾が彼女にははっきり判る。他方彼女は知的でその上「靈気のような」（４．３）女なので、「冷たい女——セックスレスな女」（３．４）ではないがジュードと違い性的本能が弱い。又学寮長の返事に対しジュードは溺情的に反応し、スーは冷徹な批判を加える（参．３．４）。これらの相違は、二人の愛の関係に於て情緒的没我と知的主我的の違いになって現れる。ジュードが『君は心情が僕と同じだ』（４．１）と言うと、スーは『だけど頭が違いますわ』（同）と答える。彼等は一つの根から分れて生えた二本の幹である。

スーが『カシードラルは時代後れです！』（３．１）と言った時、スーが高教会の敬虔な信者でないことが判ってジュードは当惑する。スーが「私は重力と発芽以外の何んな法則にも縛られていません。」と言って、二人が話し合うところ（３．２）で、ジュードはスーを文明、慣習、都会の女だと言い、スーは自分を自然法則、自然的自由の女、そしてイシュメルだと言う。それでも尚「愛するスーの行為は彼にとって一つの嬉しい可愛い謎であった。」（３．２）。彼はスーを恋人として熱愛しているが、知的なスーには相互の理解なくして恋愛は存在しない。スーの愛には近親者としての親愛と共に、「私を支持する友がほんとに欲しいんです。」（３．４）と言うとき涙を「見せ貴方こそそ

の人だと思っている」(同)と言い、自分と同じ「高い目的に志向する」(同)男性の支持者を熱望する知的熱情が共有しており、しかもそれらが交互に現れるので、ジュードは「彼女の両性具有的な情味に心をかきむしられ」(3. 4)るのである。スーがジュードを「自分ではそうと意識しないで愛していた恋人」(3. 6)と知ったのは彼がアラベラとの結婚を打明けた時である。

「この時初めてスーはジュードと同じく惨めであった」(同)が、『貴方が何時も仰言っているお考えに比べると貴方って方はおやりになることの方が進んでおりますのね。』(同)というスーの言葉は彼の観念と本性とのずれを適確に指摘している。彼の矛盾は、アラベラと一夜を明かす「俗悪さ」(3. 9)を持つ彼の、「霊肉の絶えざる内面斗争」(同)にもある。ジュードが既婚者と知って恋情は清算しなければならぬ、又出来ると思っているスーは気軽に「唯一人の既婚の親族として」(3. 7)、結婚式で自分をヒロトスンに引渡す役、彼に依頼する。式の進行中「殆ど自制を失う」(同)程の苦痛を経験する。これはジュードが考える様に病的な悦楽、片意地な自虐ではなくて、彼女が嘗て二年間交渉なしに大学生と同棲した時から、恋愛の点で発展しておらず、今日まで知的自主的に「情緒を楽しむ女」であり、この時初めて恋愛というものの根深さを体験したという風に理解したい。アラベラとの最初の出逢いの様に重要なモメントをなす偶然が第3部に用いられている。危篤の大伯母をスーと一緒に見舞う打合せをした日に彼は偶然アラベラに会う。約束の時間が迫るが、彼には結婚の「掟は厳として掟である」(3. 8)からアラベラを置いて行くことは出来ぬ。「アラベラは彼の道ならぬ恋の刑罰として意図されたもの」(同)と考える。しかもその時、かつてのあこがれの大学の百一の鐘が鳴る。「余計な皮肉と彼に思えた一致」(同)である。大伯母の埋葬後別れるとき、衝動的に二人は恋人として深い接吻をする。既婚者同士のこの接吻が転機となって、スーは観念の世界から恋愛の実行の世界に進み、それによって彼女はヒロトスンとジュードの生活と人間に大きな変化、覚醒をもたらす。

スーが不用意にヒロトスンと結婚したのは彼女が放校の理由と処分におびえ、慣習に負けて自分を世間的に正当化しようとしたためであり、又結婚を単なる形式と考えてその拘束力を認めなかったことが主因である。「友としては好いている」（４．２）が、『その程度の気持ちで睦み合う男女は例え形は合法でもその実は姦淫です。』（同）と言って彼を拒み、彼の方も自制しつつ思い遣りある愛情をそそぐ。スーが別居を懇願した時も夫の権利を強制せず個人の自由を重んじて完全な自由を与える（参、４．４）。教育委員会の諮問に「自然な慈善行為が生徒の徳性を傷付けるとは何うしても考えられぬ。」（４．６）と答える。４部の扉にある「人間の善意やはっきりした慈善の要求よりも結婚やその他の宗教儀式を重んずる者は、天主教徒或は新教徒その他何と名乗ろうとも、一人のパリサイ人にすぎぬ。ジョン・ミルトン」はこのところを指している。町の有力者は「一人残らず」（同）彼に反対し、下賤な粗野な人々、過去に不幸な家庭経験を持つ独立した判断の人々が彼の味方をした。諮問の結果、彼は家庭を失った上に職業も失う。それ以来「彼は有徳な人々の手で柱から柱へと堪え切れぬ程ぶつけられた。」（６．４）のである。スーの寄宿寮でもここでも、世間は即ち慣習は行為の一部を見てそれがその人の全部と考え、しかもその一部の行為に就てもその動機まで思いやることをしない。この様にして世間は人を殺すことがあるものだ（参、礼拝堂のオルガン弾き）。これはジュードとスーの運命であるが、ヒロトスンはこの経験から「義や正の感情を本能的に手放しに行えば我々の古く固った文明では無難に済まないことを心得ていた。」（６．４）。性格が弱いヒロトスンには当然の人世知であるが、この順応、妥協からはハーディの言う漸進的人生改善は産れて来ない。ジュードを恋人として愛するスーはジュードにアラベラへの愛情がないことがはっきりしない限り肉体関係を結ばない。肉交は魂の融合に保証されねばならないし、愛は自発的に与うべきもので無理や強制は愛を殺すと考えている。これが彼女の『口では言えない微妙な楽しさ』（４．５）なのである。そしてジェ

リイのエピサイキデオンの一部を引用して『これが私だと思っ下さい！』（同）と言う。ジュードは『君は精霊、肉体を離れたるもの、愛らしくなつかしい、人じらしのまぼろし——うつそみとは思えぬ女だ。』、『君は本当の愛が出来ぬ女らしい。』（同）と答える。併しジュードも彼の野心を捕え彼の観念を束縛していた社会文明の慣習、因襲から離脱し、『少しも俗悪なところのないスーによって高められた。一二年前までは自分にも誰にもとても不可能と思えたことをスーはやり遂げさせてくれた。』（5. 3）と言い、自己覚醒を遂げるのである。

第5部1—5章は結婚と愛の問題を主な内容として筋が展開する。当然、結婚は慣習の批判になり、愛は理想につながる。

スーにとって愛は独立した自己が何の拘束も受けないで自己を投与する自発的行為であり、『愛の情熱の本質は無償の好意である。』（5. 3）。結婚は所有関係であり、『法律で結合し義務づけた愛の強制』（同。参。彼女の死んだ夫；洗礼式）であり、花嫁は『事務的契約の下劣な諸条件』（4. 4）の下に引渡される無心な『若いいけにえの牝牛』（同）であって、『法律的義務付けから不識の間に起る姿勢が怖ろしい』（5. 3）、そこから起る結婚の悲劇は『現代の野蠻な慣習と迷信』（4. 2）の所産である。『ちゃんとした社会になれば、女が産む子供の父は誰も兎や角言う筋合いのない女の下着の型と同じに、女だけの個人的問題になるでしょう。』（4. 5）とゴトイン流の言葉を言う。彼女の怖れるところは、反対にアラベラが結婚に認めている長所である。

『正式に結婚するとね、あとは事務的でね、お金の方の都合もいいですよ。…悶着が起って追い出されたら法律ってものがついてるし…向うで出て行きや…家財道具はこっちのものだし、それで泥棒にならんのかならね。』（5. 2）。これは結婚を極端に利害関係の点から割切った言葉であるが夫婦の関係に法律が入ってくることは事実である。ハーディは「あの完全な互いの了解、目くばせ一つ身振り一つで…二人の間に通じ合う互いの理解が彼等二人を一つの全

体の二つの部分に見せていた。」(5. 5), と「彼等と一緒に掛小屋の酒場を出た。キリスト教国の並の夫婦に始終見る責任をなすり合う尖った気持で。」(同。参. 6. 8——「宿の主人は…偶然或晩アラベラが、靴をジュードの頭に投げつける音をきいて、別に非難するところのないちゃんとした夫婦だと決め何も文句を言わないでおいた。」)を対照して、彼女達スーとアラベラ二人の結婚生活を描いている。

強制, 義務, 利害で成り立つ結婚から産れる子は愛を知らぬ子, これを重ねて行けば人類は益々慣習の奴隷となる。スーが『50年 100年さきにはこの目の前の新郎新婦の子や孫が…のた打ち回る人類を私達よりもっと生まなましく見るでしょう。そうだわ,

我々のこの姿に似たるものの形ども

忌わしく繁殖して,

そうになったら怖くてもう誰も子供など産まなくなるわ。』(5. 4)と言うのは、ジュードとアラベラの間に出来た「故老ちゃん」をアラベラの依頼で迎入れることになり、彼の学校教育のため二人が結婚しようと努力しているとき、教会で他人の結婚式を見た時の言葉である。「故老ちゃん」は単独に彼だけを見れば突飛にも思えるであろうが、上述したことと結び合せて理解するとき彼は意味を持ってくる。

2章でアラベラが夕刻困窮した様子でジュードを訪ねて来る。スーは一目で彼女が『野卑な』女であることを知る。彼は哀れなるものへの持前の優しい同情心から彼女に会おうとする。懇願を続けた後終にスーは『仕方ありませんわノアー、貴方が何うしてもと仰言るのならノ』と言って突然心を引裂くとも見える睨り泣きを始め、その夜ジュードに身体を与える。スーから見れば、ジュードとの頭のずれが未だ完全に埋ったという確信がない、このままでは無償の好意は行えない、それは愛の汚損である。その上アラベラの出現を動機とするもので一種の強制であり、その点からも愛の汚損である。嘗てのスーなら自分

を与えないであらう。しかし一方彼女は彼を愛して同棲している。そしてジュードは『僕の中にある最もよき最も高貴な総てのものは君を愛している』と言う。その最もよき最も高貴なものにスーは縋り、希望を託し、信頼して彼を此の世で唯一人の『親愛な保護者』と見ている。アラベラは彼を「酒に誘い彼の徳性を失わせるであらう」。そうした二人の関係はスーが既に知っている事実（参．4．5）である。そうなれば、ジュードの中のよきものを汚すことになり、それはスーにとって自己の分身を失うことであり、此の世に見出した唯一の愛を失うことであるからである。その後「故老ちゃん」を迎えるに当って、ジュードが『今の時代の若い者達は、全部が一同として、僕達大人の子供であり、僕達全体から世話を受ける権利を持っている。』（3章）とゴドインの見解を述べたとき「スーは椅子から跳り上り献身的な激しい愛着で彼に接吻した。」（同）。二人の間の頭のずれが完全に埋ったのである。そして、スーは『今は貴方と私は本当にお互いのものになったのですし、私には貴方を失いはしないかという恐怖など全然御座いません。』（同）と言う。進歩的思想と異教的性情と魂の結合の愛と、更に『好意に基づく場合の寛大』、『誠実』（同）という両方の家系的長所とが完全に一致した、プラトンの理想の、数年間の生活が彼等の悲痛な人生を埋め合せる。その「夢の如き樂園に生きる」（3章）数年間の生活は描かれていないが、二人が「故老ちゃん」を連れて農芸展覧会を見に行ったときがそれを象徴する。バラ会場でスーはジュードに、『ギリシャの明るい歓びに帰った様な気がしますわ。不健康と悲しみを目の前から消してしまって、ギリシャ以来2500年が人類に教えて来たものをまるで忘れてしまった様ですわ。』（5．5）と言う。

「故老ちゃん」のため自分達の主義性情を抑えロンドンに行って結婚する。その隠れた行為が却って町の人々の疑惑と好奇心を惹き、以後二人は慣習の非難攻撃に付き纏われる。そしてスーは『だって皆は私達が結婚していると思わないぢやありませんか。』（5．6）と言って、結婚を世間の非難の楯にする

様になり、ジュードに縋り、又自分に母を求める「故老ちゃん」を憐れみいつくしみ乍ら、生来の繊細な感受性は一層鋭敏になり（参・同）、今では一寸とした刺戟も唇の震えになり涙となる（参・5・7）。シェリーの理想的愛エイシャは明知と忍耐のプロミシウスの力となって人類を解放するが、「天国の最高天使」（4・5）スーは斯の様にして「本性上上昇を志し乍らこの宇宙の支配するままに地上の雑物の中に圧倒されて仕舞う」（5部の扉）のである。一般に女は結婚によって愛の静かな安住の持続の願いのなかに自我喪失の傾向を持ち、男は常に動的な発展を求めて完全な自己顕現を追う傾向を持つ。弥縫策のサイシーリア以後結婚する多くの娘が結婚に不安を感じ、妻となつては夫にすがるのが考え合わされる。それは未だ自立の力を持たぬ幼い子供の敏感と縋りに似通っている。更にジュードの自我は強い本能とエネルギーに深く根をおろしている逞しさを持ち、スーの自我は弱い本能に対する知性の勝利の形で強く、嵐にあって弱いのはスーの自我であることも考えあわされる。「今その観念が彼が初めてスーに逢った時彼女が占めていた地位に近づきつつあった」（5・7）ジュードはスーに導かれ、靈肉の相克をスーに於て解決され、苦難の中に生来の誠実、善意、愛情を伸ばしつつ、一家の責任を背負う男として健全な個性を具え、益々強毅に逞しい人間へと成長する。大学の幻は今も消えず、『あそこは僕にとって宇宙の中心なんだ、僕の早い頃からの夢だからね。…多分あそこはその中目を覚まして寛大になるだろう。…僕はも一度あそこに帰りたい——僕の死場所もあそこになるだろう！』（5・8）と言う。その幻の大学は彼にとって、今ではスーが言う『何ものも恐れぬ高き思考の偉大な中心』（5・7）であって、彼の知識の欲求は高き思考への純粹な知の憧憬として我々に訴える様に物語られている。作者は人間の本能である知的欲求が卑しい本能である野心、恣意の雑物を持たぬとき、真の文明が誕生することをジュードの生涯によって示唆している様である。

ジュードは人生の落伍者として一家を連れクリストミンスターに来る。大学記

念日の行列を待っている人々の前で彼が『今日の社会方式には何処か狂ったところがあることをはっきり認めます。』（6・1）と言っているとき、スーは人混みの中にヒロトスの姿を認め、『妙に彼が怖い気がする』（同）のであって、ジュードの前進とスーの後退が対照される。作者は「男が結婚の日までかかって相手の女に就て知ることを女は最初会った時相手の男に就て知るが、結婚すると男が最初の握手の時知っただけしか相手の男に就て知らない。女の知識は洪水の様にどっと来て段々吸い込まれてしまうのだろう。」（1866）と言っているが、それをここに援用してみてもよい様に思う。

2章と3章は「故老ちゃん」が両親の生活苦を軽減するためスーの二子を絞殺し自分も縊死するのをキッカケに、スーは完全に慣習に捕えられて自己の力を失い、ジュードはその自然な性情と、スーによって目を開かれた人間性の高貴の観念の上に立って、拘束されざる進歩思想を進めて些かのゆるぎもないことを示す。悲歎のなかでスーが聞く『汝ら学ぶべからずノ』、『汝ら努力すべからずノ』、『汝ら愛すべからずノ』、は夫々文明、社会、宗教の慣習因襲に彼女が完全に捕えられたことを意味する。『文明がこれがおれの仕事だと言わんばかりに本能をゆがめて仕舞ったんです。自然の言葉を真正直に守って来た私達を運命が今うしろから突刺したんですノ』には自然と文明の敵対関係が言われていると共に、文明は作者が次章に書いている因襲的キリスト教を内包しており、運命は「私を苦しめる諸々の力、人間の形をとった迫害者」である。運命は異教の人格神を意味しており、彼女は先づ彼女の性情に即した運命感に捕えられる。人格神は『私達を主宰するあの力の総ての古代の怒りが私達の上にそそがれた』という復讐神になり、そこから今迄の自由な愛を『恐ろしい肉慾——アダムの呪い』と見るキリスト教的刑罰神に移っている。『私はピンで身体中を刺してなかの悪いものを血と一緒に全部流してしまいたいノ』と言う。スーは生きた肉体に魂で書いた今迄の言葉を自主性の喪失によって紙に印刷した文字即ち儀文、型にはめこんだ慣習因襲、によって消されてし

まったのである。スーがジュードに『私は間違っていたんです——いい気になって思い上っていたんです！』と言うのを聞くと私は、

やがてさかしき知英におごり己惚れて、

彼は蠟の翼を振り身の程をこえて昇ったが、

蠟は溶け、神々はこぞって彼を破滅させた。

（マーロウ：フォースタス博士、序詞）

を想い起す。スーの敗北意識は心の中での神と悪魔、良心と野心的意志の間の戦いの告白ではなく、又「誇りと野心」に身を誤り、「自分自身が地獄だと言って「懲罰者」への「服従以外に道がない」（以上失楽園、IV.）セイトンの罪悪感とも違う。それにしてもジュードの言葉、『女性詩人、予言者、その魂がダイヤの様に輝いた女——この世の総ての賢者が誇りとしたであろう女性』、『僕がこの世で幸いにも目にした前途洋々たる知性を具えた人の、なつかしく悲しい、胸塞ぐ最も痛ましい廃残の姿。』（8章）は再び、

健やかに伸びたかも知れぬ枝は断ち切られ、嘗ては

この学ある人のうちに成長した月桂樹の枝も焼かれました。

（フォースタス博士、閉辞）

を再び想起させる。

テスはクレアを責めず総ての責めを自分に帰す（テスの歎き）。深く自然な性情の永遠の女性の、底知れず深い没我の愛の自責は深く我々の胸を打つ。それは何ものも終に抹殺し得なかったテスの純粹さである。暮れ残る西空のはの白さにも似た希望を人生に持っていたかに見えるハーディは、ゲーテと同じく人間への強い信頼を内に持っていたのである。併し彼の文明観は教える。即ち、同じ自然な性情の女でも、主我と知性のスーの罪の自責が我々に訴えるものは判断を通して後の悲愴であり、又強い衝撃にあって自己を失い、優れた知性が狂信に一変する、その主我の脆さである。主我が強く、そのため自責に止まらず更に罪のつぐないとして進んで自己を破滅に委ねる点ではスーとヘンチャ

ードは共通である。又ユースティシャは野性的な自我の欲望挫折による自己破壊を、一方スーは文明的自我の罪悪意識による自己破壊を、夫々極端な形で表現したものと言える。

医者は「故老ちゃん」に就て、今に誰も生を願わなくなるだろう。これはその初期の兆候だと言い、ジュードは『あの医者は進んだ考えの人だ。だがそれだけでは何の役にも立たない』（2）と言う。ジュードのこの言葉は又作者の人生観を言っている。スーが判断力を失って、『一体どうすればいいんでしょう？』（2）と言うと、『手だては何もないよ。もの事は凡てあるがままなり、やがてその定め果に行きつかん。』（2）とアガメムノンのコーラスを引いて答える。彼は悲劇の原因を自分の肉慾が犯した誤りとして再三反省はしているが、彼にとって『僕達の戦いの相手は人間と無意識な環象』（3）であると言う高さに立っている。

この小説の悲劇の直接因はジュードが言う様に肉慾と慣習である。ここに到るまで慣習は盛り上りを持続して来たが、肉慾には肉付けされた盛り上りが無い。この6部2章3章の肉慾の問題は附会の感じをさえ与える。この二つの主因が共に同様の盛り上りをもってここに到っていないところに此の小説の弱点があるのではなかろうか。何れにせよ、スーは『世間と世間のしきたりはそれだけのちゃんとした値打ちを持っています。』（4）と言い、『服従することに依って彼を愛すようになろうと心がけ』（4）でヒロトスンの許に返る。

ジュードは肺病の身で雨に打たれ乍らスーを訪ねる。彼が立っている教会のそばの小学校から「万象の呻きをまだ知らぬ小さな多くの声、例の単調な響き」（8）が伝ってくる。万象の呻きはジュード、スー、ヒロトスンそして子供達も、凡そ自然な情愛に生き、ものを考える程の人なら此の世に必ず聞く呻きである。小学生を使い、呼び出しを受けたスーはジュードと知らず教会に来て、彼を見恐怖的に彼を避ける。結局、今の結婚は『単に教会の結婚』『唯名前だけの結婚なの。』（8）と言い、教義と愛の板ばさみに悩み苦しみ乍ら、

ジュードに熱い接吻をする。その夜、罪悪感から『懺悔をし——最後のことをして』（9）義務を果さねばならぬと決め、彼女のにがい『コップを殿まで飲む』（8）のである。この場の悽愴感は、それが不合理に、或は病的に、自分に強制した罪の意識から来る義務感に基づいているため、被虐淫乱症的興味の文学に一転する可能性を含んでいるのではないか。

アラベラは食うことの他人生の意義を知らぬ女で、その時々の実実に順応して彼女なりに巧みに生きて行く。彼女の知英はこのために働く。それは動物が自然の環境のなかで自分の生命を守る本能の知英であり、彼女にはモラルも反省もないが、しかし悪人ではない。組織的に陥穽を設けて人を陥れるイアゴーでは勿論ない。スーに別れてその夜クリストミンスタに帰った痴呆に似たジュードに対し、彼女の即物的常識は却って健全に見え、又同じ夜のスーの狂態に対し、エドリン老婆の人生体験のうちに人性の自然と慣習がおのずから調和している知英は殊更に健全に見える。

ジュードとスーの生涯を振り返ってみると、

幻想は人を焦らし、知識は真情を麻痺させるもので、

口当りがいいものは腹に入るとにがい、酸っぱい、

我慢ならないものだとも知らないで、

（テネブレ風に、Ⅲ）

ということにもなろうか。エドリン老婆は言う、『アア！ほんとにお気の毒だ！確かにきょう日の結婚は葬式だ。…50年前とは御時勢が変わってしまった！』

（1962. 1. 5）